温泉津町誌（中巻）より

ともあれ石見銀山が世界貿易を通じてイベリヤ植民帝国の繁栄を支え、初期資本主義の発展という世界史上においても極めて重要な役割の一端を担ったという事実は重要である。一方、国内においては銀山領有をめぐって展開された熾烈な争奪戦の過程で、社会や経済の仕組みもまた大きく変容してきた。ここでは触れることはできないが、永禄五年（一五六二）刺賀の岩山城を守り戦死した尼子の武将多胡辰敬（たこときたか）の遺した家訓は、近世を指向した思想の芽生えを見せるものとして注目される（和辻哲郎『埋もれた日本』所収）が、そうした思想は社会構造の変質を反映しているといってよいだろう。特に貿易という外に向かって眼の開かれた温泉津の場合、その変貌も著しかったと思われるが、具体的な資料はない。これも今後の課題として残さなければならない。

四　毛利氏の石見銀山掌握と温泉津

銀山温泉津御公領の事

毛利氏の石見銀山掌握と温泉津の関係については、既に中世編で述べられているので、ここでは近世に関係の深い所を摘記し、近世の温泉津を展望するに止める。

元亀二年（一五七一）六月二六日付けの小早川隆景、福原貞俊、口羽通良、吉川元春連署の栗原内蔵丞宛書状は、「恐れ乍ら言上仕候、温泉銀山御公領之事、此間洞春様仰せ付けられ候如く、少茂自余之御用ニ仕られず、御弓矢に御用いらる可く候……」（毛利家文書）と述べる。温泉津は銀山と一体として把握され、そこから挙げられる収益は洞春様（毛利元就）遺訓のとおり、御弓矢（軍備）以外には用いてはならないとしている。それゆえに温泉津、銀山は御公領として特別に把握されたのである。この体制は石見銀山が豊臣秀吉の管理下に置かれた天正一二年以降においても変化はなかった。

豊臣政権と石見銀山

天正一〇年（一五八二）四月、織田信長の先鋒として毛利討伐に出陣した羽柴秀吉は、備中高松城に清水宗治を攻め、有名な高松城の水攻めを行った。たまたま六月二日本能寺の変が起こり信長は天下統一の業半ばにして倒れた。秀吉は直ちに安国寺恵瓊をして和平交渉に当たらせ、清水宗治の切腹をもって一応の和平は成立した。この交渉の成否は実に秀吉の命運を決する重大事であったが、この成立によって信長の後継者としての秀吉の立場が確立された。

秀吉と毛利との本格的な和平交渉は翌一一年五月ごろから再び安国寺恵瓊を介して進められた。八月ごろにはほぼ交渉がまとめられたようである。恵瓊から小早川隆景の老臣井上春忠に宛てた書状には、吉川元春の子経言、小早川隆景の養子元総を人質として大坂へ送ることを促し、なお「然間、吉田（毛利輝元）へハ今朝使僧指上条々申上候、林山内（就長）申され候ハ、吉田之御事者銀山御引渡候之間、別更御短束有間敷候」と、石見銀山の引渡しは毛利輝元も既に承諾した旨を伝えている（小葉田『日本鉱山史の研究』）。秀吉としては当初の領土割譲の条件を緩和してでも人質政策による毛利支配と、特に石見銀山領有という実利を選択したものであろう。

こうして天正一二年ごろから石見銀山は秀吉の管理下に入るが、その経営は毛利との共同経営の方式がとられたようである。秀吉は近実若狭守、毛利からは三井善兵衛を派遣し銀山奉行として共同管理に当たらせた。秀吉は更に一四年には永田大隅守、一五年には三枝牧源蔵、一六年には増嶋左内らを銀山目付として銀山に派遣したようである。三枝牧、増嶋らは石見銀山が徳川の直轄となってから後も引き続き銀山役人として銀山に留まっていたようである。

石見銀山の富源を入手した秀吉は、最大限にこれを活用して豊臣政権の確立を推進した。

天正十三年、豊関白、頒二賜金銀於諸侯卿大夫一、金五千枚銀三万枚……蓋十三年頒賜之銀、疑此石州銀也

秀吉は莫大な財力を駆使して絶対専制君主への道をばく進する。ここに述べられたように三万枚の銀は疑いなく石州銀だという。さきにあげた天正一六年の生糸買占めや文禄三年の焔硝買占めの事実など、石見銀山の領有があって初めて可能なことであった。

富と権力を背景に秀吉はついに大陸進攻を企図するに至った。文禄慶長の役である。この大陸遠征には莫大な軍用金を必要とした。『塩邑志林』は次のように記している。

> 倭使小西飛来議封事、時以京営将佐楊貴録、為館伴、小西飛賂楊、有私覿之礼、如刀盒之類、猶常見、惟銀銭多作人馬之状、更有銀一片、形類橡桑、厚二分、長七寸許、中有一脊、陽凸陰凹、両旁斜鑿数槌、酷似葉弁、側有一印、長寸余、隠起三字、曰石州銀、……。

ここに述べられていることは、慶長の役で敗退を余儀なくされた日本軍の講和特使となった小西行長が、講和会議に持参した日本の軍資金のうち、石州銀について述べられたものである。これについて『金銀図録』「石見国挺銀」篇は次のように述べる。

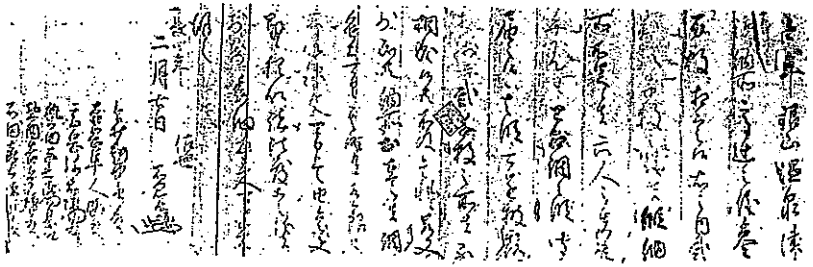
> 重サ四十三匁背石目、愚近藤守重按ニ、此銀朝鮮征ノ為メニ造ラレシナルベシ

秀吉の大陸遠征のため特製の銀貨で、これは博多で鋳造された石州銀であるというのである。

この役の結果については改めて述べる必要はない。豊臣政権の成立――成長――崩壊という一連の過程に、常に石見銀山の存在が大きくかかわっていた事実は重要である。

銀山温泉津　慶長三年（一五九八）五月、毛利輝元は石見銀山管理の実質的責任者である佐世石見守元嘉へ御納所の事　書状をもって次のように指示した。

（『古事類苑』「泉貨部」）



写1　銀山温泉津御納所高辻（慶長4年）（吉岡家文書）

> 今度温泉銀山納所之儀、弐万弐千枚ニ相定候、就其当役六人之者共申子細聞届候。然間相残谷ニ催士六人之事右之役目相除之、当時之下代萬六人一円ニ任置之候、彼納所無出入之様可申付候、先年銀山改之時催士屋敷分為替給地遣置候ツ、於此段者不可有別儀候条以来之儀何篇可令馳走之由申聞候也。
>
> 慶三
> 五月十三日　（毛利輝元）花押
>
> （吉岡家文書）

慶長三年の「温泉銀山」の納所（なっしょ）、すなわち徴税高は銀二万二、〇〇〇枚と定めた。直接銀山を管理している六人の衆に子細申し聞かせ、徴収に「出入これ無き様」公平に申しつけよ、と指示した。「当役人六人之者」とは後の資料に出る今井越中守、吉岡隼人、宗岡弥右衛門、熱田平右衛門、惣内吉兵衛、石田喜右衛門で、いずれも銀山に居住し直接管理に当たる責任者であったと思われる。ここでの徴税額二万二、〇〇〇枚をどのように徴収したのか、具体的な対象や徴収機構についてはこの資料からは分からない。

次の資料は慶長四年二月、佐世石見守から今井越中守ほか五人の銀山当役人に宛てた「銀山温泉津御納所高」の指示である。

> 今年銀山温泉津御納所高辻之儀参万枚ニ相定候、右之内弐万八千枚之儀者縦納所不足候者、六人之者共弁ニても可相調之段聞届之候、其段可遂披露候、相残而弐千枚之

井田村誌

昭和十六年(ここ)

編集

5、耳塚

耳塚は井田村字鷲峰寺泉庄吉の近所にあり院内總兵衛なる者豊臣秀吉の朝鮮征伐に從ひ武を縱横に振ひ敵軍を破る時に敵軍の耳をば切取り數多持ち歸る總兵衛よつて耳塚をつくといふ。塚今尚存す

6、御經塚

9、窪田家

窪田家は井田村大字福田にあり、其の祖は邑智郡三原村丸山城主小笠原長泰の臣窪田越前守の一子維善なり、維善もと願林寺禪宗なるを阿彌陀佛を安置し淨土眞宗に改宗す。其の後裔今日に至るも尚當時の住職たり

10、中村家

中村家は井田村字殿村にあり當家の祖南北朝時代勤王の士なりとの口傳あるも立證するの古書類を藏せず中村武八郎德川末期に庄屋を勤めし事ありしといふ。

11、笠井家

笠井家は井田村字荻口にありしものなるが近年同村字殿村に移轉せり

當家の祖笠井彦彌之助信州にて武士なりしが過失により國外に追放さる、ところとなり浪々の末銀山領大森代官の臣となる代官の命により大家一帶の地の檢地しの頭となり大家村に住居致せしを更に荻口に轉居す。祖信州より善光寺の三寸の阿彌陀如來を受け持ち來りて當家に安置す。現戸主笠井重美迄十三代目大家村正法寺檀家なり

12、川島家

川島家は井田村字鷲峰寺にあり。其の祖川島惣右衛門豊臣秀吉の朝鮮征伐に加はり戰功をたて後長州に歸國せるが人命を弥ふ武士の生活を厭しか阿彌陀佛を脊負ひ戰に使用せし弓を持ち旅の生活をつづくる折り遂に鷲峰寺の地にとどまり百姓となる。元和二年五月七日惣右工門死去。爾後先祖の遺品とし弓をば代々受繼ぐの習となれり。七代久兵衛の頃當家繁榮致せしが庄屋を勤むるの記錄存せり、現戸主彦太郎まで十一代波積村嚴龍寺の檀家り

左記過古帳に據る

初代	惣右衛門	元和二年五月七日死去	七代	久兵衛	文化十年三月十六日死去
二代	久兵衛	元祿二年九月五日死去	八代	利惣兵衛	文政四年二月九日死去
三代	德右衛門	天和三年十月廿一日死去	九代	惣工門	文久二年九月廿九日死去
四代	德右衛門	享保十四年十一月十八日死去	十代	惣四郎	文久三年九月廿五日死去
五代	惣右衛門	享保五年六月十八日死去	十一代	彦太郎	
六代	惣右衛門	寶曆十年八月十四日死去	十二代	義視	

13、大場家

大庭造神魂命八世孫天津麻良命之後也

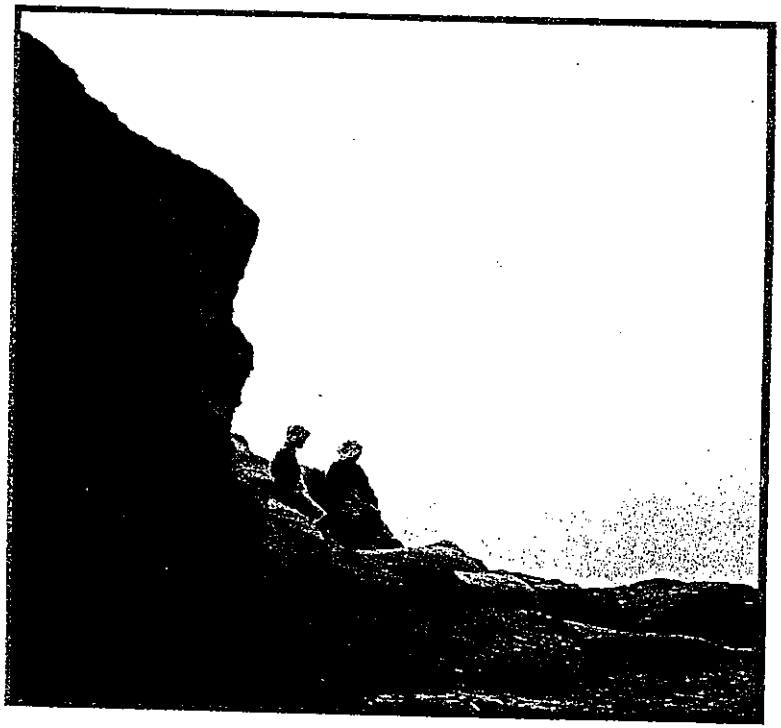
大庭は和名抄相摸の國高座郡、美濃國石津、美作國大庭郡、但馬國二方郡ともに大庭鄉あり。

相摸・但馬には訓註ありて、於保無波と訓り、こは音便なれば於保爾波と訓べし、扨て此地名の內美作の國ぞ此代の本貫なるべき。

天神本紀、饒速日命の御供の中に五部（イツトモ）造爲伴領率二天ッ物部一天降供奉りき、大庭造、云々と見ゐ、この氏も

山陰

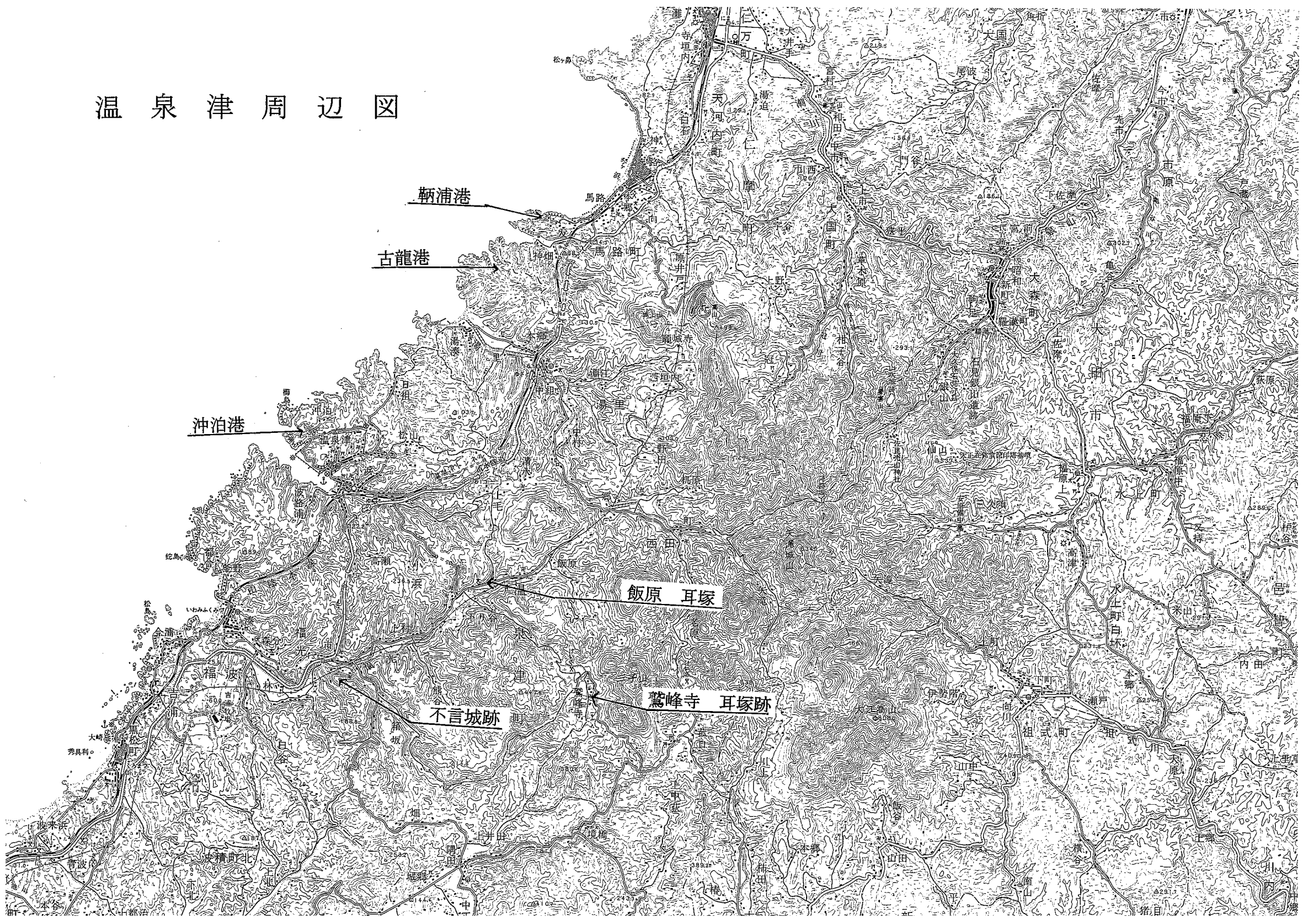
温泉津（ゆのつ）



耳塚

温泉津の上村の路ぼうに耳塚がある。耳塚といえば京都のものが有名だが、これは自然石、しかし温泉津のものは耳のない可愛い顔が刻まれた珍しいもの。

むかし、豊臣秀吉の朝鮮征伐のとき、院内総兵衛という人が奮戦しました。そのとき総兵衛は敵兵の首をとっていては、働きにならないので、その耳だけをたくさん切りとってかえり、戦功のあかしといたしましたが、あとで、総兵衛は、それらの敵兵の方々の供養をするために、この耳塚をつくったものとの言い伝えがあります。

この耳塚にお参りをすると難聴のものも、その耳がよく聴えるようになるとのいい伝えがあり、むかしはお参りする人が、あとをたたなかったとの話であるが、今はお参りする人もなく、草に埋っている。

温泉津周辺図